

おお くら まご べ え

大倉孫兵衛

良きが上にも良きものをつくる

ー日本陶器、大倉陶園の設立に参画ー



大倉孫兵衛 (1843 ~ 1921)

出典：『日本陶器七十年史』

■ 生い立ち

大倉孫兵衛は、1843(天保14)年、江戸四谷伝馬町の絵草紙屋・萬屋、の二代目大倉四郎兵衛次男として生まれた。この店は福沢諭吉の著書「西洋事情」の取扱店であった。また、1874(明治7)年に大倉書店を開業し、夏目漱石の初めての単行本「吾輩は猫である」もこの書店から刊行されたことで知られる。

1862(文久2)年、父の病没で「萬屋」を引継ぎ、横浜で絵草紙の販売をしていた頃、森村市左衛門と知り合い、私利私欲を捨て、国益を第一に考える思想に共鳴し、また森村市左衛門の妹ふじと結婚した。

■ 森村組から日本陶器の設立に参画

1876(明治9)年に森村市左衛門が設立した貿易商社「森村組」に大倉は当初から参画した。森村組はニューヨークでモリムラブラザーズを開設して花瓶、置物などの商品見本を見せて半年あるいは1年後に渡す受注生産の販売施策で販売を広げていった。

森村組は1892(明治25)年に日本での生産を確立するため名古屋店を開設した。そして1896(明治29)年に東京、金沢など各地に散在していた絵付け工場を名古屋市東区主税町(現:主税町公園付近)に集約し移転させた。これは、瀬戸

や美濃など焼き物の本場であり原料の粘土の主産地に近いこと、日本の中心にある名古屋港の開港が1907(明治40)年に予定されていたからである。また、当時の製品はハンドメイドで絵付けの美しさ、細工の繊細さで「チカラマチ」ブランドとして知られる。

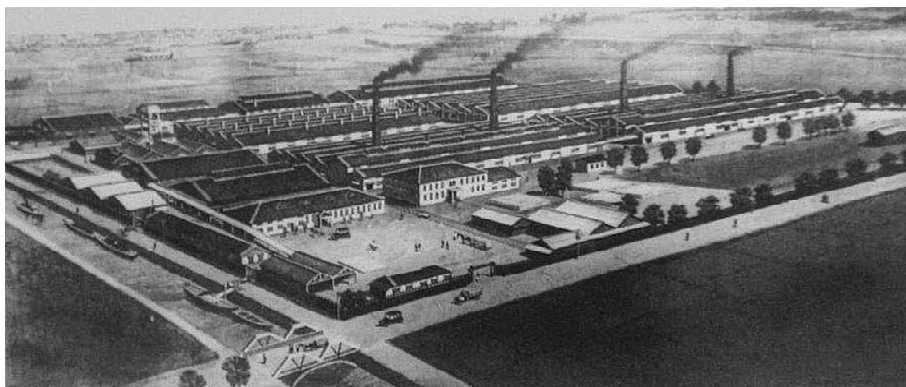
その後、オーストリア、カールスバードのビクトリア工場を視察、白地陶磁器の窯、機械器具などの図面を得て研究を進め、1904(明治37)年に現在の名古屋市西区則武町に広大な敷地を確保、「日本陶器合名会社(資本金:10万円)」を設立、初代社長に大倉孫兵衛の長男大倉和親が就任し、近代的な製土工場、成型工場、釉薬絵付け窯工場などの一貫生産工場を建設、生産体制を確立した。

また、事業の成功と発展のためには、それぞれの事業に専念することが肝要という一業一社の理念から1919(大正8)年に碍子部門を日本碍子に分離独立、1936(昭和11)年に日本碍子から点火栓(スパークプラグ)部門の日本特殊陶業が分離独立し、一社一業の精神を実現化していった。



日本陶器合名会社の創立時の工場

出典：『日本陶器七十年史』



創立時の日本碍子の本社工場

出典：『日本ガイシ100年史』

■ 大倉陶園の設立

1918(大正7)年、大倉孫兵衛と大倉和親父子によって東京蒲田(現:横浜・戸塚区に移転)に大倉陶園株式会社が設立された。この工場は、大倉孫兵衛が私財を投じて「良きが上にも良きものを造る」ことを目的に商売抜きの道楽仕事として英国の骨粉焼、フランスのセーブル、イタリアのジノリー以上の美術陶器づくりを始めた。

(寺沢安正)